

参考資料2

＜成果＞生徒・卒業生・保護者

「先生が言っていた「生老病死」について考えるようになった。私はどう生き、どう老い、どう病気に立ち向かい、どう死ぬかは基本的に他人が決めるのではなく、本人がしっかり考えて決めなければいけないと思いました。ですから私もしっかり考えます。先生の授業を受けて、生きるってこんなに大変だと改めて感じました。私はまだまだ子どもだけど、大人になって子どもができたなら、先生に習ったことを教えてあげたいです。」

「臓器移植の授業を3か月間受け、死について考えたり話したりしていると、生きることは改めて大変なことだと感じました。」

「死は誰にでも突然起こりうることなので、一日一日を大事に生きようと思いました。」

「脳死になったドナーの臓器が誰かの助けになり、そのドナーの方の死の重さが、レシピエントの生の重さに変わることは、すごいことだと思いました。変な言い方かもしれませんが美しいことだと思いました。」

「私は小学生の頃、よく平気で友人に向かって「死ね」という言葉をつかっていたことがありました。けれど、授業を受けてから、そういう言葉を軽々しく言うてはいけなことがわかりました。反省しています。そしてこの頃死について考えるようになりました。そのことから、自分のいのちも他人のいのちもまはしては生物のいのちも大切に、生きているということを感じることは大切なことだと思うようになりました。」

「臓器移植について学び、自分の死、他人の死を考えると、生き方が変わってきた。」

「生と死は正反対の事だと思っていたが、授業を通してイコールの関係だと思った。死について考えるからこそ生があり、生について考えるからこそ死があるのだと思う。生と死があるのは、私たちが一生懸命、生きていかなければならないと思わせるものであると思う。」

「臓器移植の成り立ちや日本人の考え方と海外の考え方の違いを知り、今でも臓器移植についてテレビや新聞に載っていると、目を向けて、家族と話し合っている。」

「死を考えることは誰でも辛いことですが、人は死を考えることで、しっかり生きたいという思いを持てるし、強くなれると思うようになった。」

「今までと違った、本当のいのちの大切さ、生きる意味を考えられるようになりました。佐藤先生に教えてもらえてよかったです。本当にありがとうございました。」

「先生の授業を受けて、特に母親には感謝する気持ちが大きくなった。この頃、死について考えているけど、不思議に思えてくる。これからは少しずつちゃんと考えていかなければいけないと思った。」

「卒業後、大学(体育学部)での授業で脳死について触れることがあった。しかし特に臓器移植についてまでは取り上げなかったので、教授に「なぜ取り上げないか」と尋ねた。その答えは「時間がない」とのことだった。また、その時、クラスメートに高校時代に臓器移植を学んだということを話しても特に関心を持たなかった。保健体育の教員免許の取得を目指す人たちが多く中でとてもショックだった。佐藤先生の授業を受けられたことは、私の中の宝物の一つです。」

「この臓器移植の授業を受けてから様々なことを学び、いのちについていろいろ考えるようになった。ゆっくり時間をかけてだした答えは「臓器を提供したい」という結果だ。その考えを家族に話してみると、最初はあまりいい顔はしなかったが、何度も何度も臓器移植の授業を受ける度に家族と話し、家族は私自身の考えを尊重してくれるようになっていった。なぜ私が臓器を提供するという意思を持ったかという、第一に私が臓器を提供することで多くの命が救えるということ。第二に将来、看護師という医療従事者の立場になる夢を持っていて少しでも多くの患者を助けてあげたいという気持ちを元々持っていたこと。そして第三に私自身がドナー、またはレシピエントの立場になったとき、どのように考えるかを考えたうえで得た結果である。また、移植コーディネーターの方の話を直に聞いたこともいい経験になった。現在は看護学生として学校に通っているが、将来看護師として病院で働くだけでなく、さらにステップアップして1人でも多くの患者を支えていきたい。そのような私には移植コーディネーターという職業にとっても関心をもつことができた。大学の友人に臓器移植について話してみてもあまり内容は分かっていない。私は授業をうけたからこそ、その大切がわかるようになったが、世間はまだまだその知名度は低い。トキワ松学園のような保健の授業を学べる学校を増やし、一人一人が理解を深めていくことが大切だと思った。」

「私は小学3年生の時に父を亡くしました。今まではただ辛いだけでしたが、先生の授業を受けていくうちに新しい考えや知識が増え、今まで違った視点から死に向き合うことができるようになりました。そして臓器移植について母と会話を重ねていくと、母の死に対する考えを知ることができました。これからも自分の死についての問題を投げかけていきたいです。」

「授業を受けるまで、生死について深く考える機会はなかった。しかし授業を受けてからは、テレや新聞にその話題があると自然に耳を傾けるようになった。また親の意見や気持ち以外に、友人の意見が聞けたり、同世代の考えも知ることができた。このような授業がないと高校生同士でいのちについて話すことはなかったと思う。保健の授業で学んだことを大切にして、これからも自分なりに生死について考えていきたいです。」

「一人ひとりの行動や発言で、一人でも多くのいのちが救えるかもしれないということに気づきました。私はその力になりたいと考えます。社会的にもっと理解や関心が高まって欲しいと思います。」

「私の意思を家族に伝えなければ、実際の場面になった時、家族は大変な思いをすると想像できた。そのためにも自分自身のいのちについて考え、意思表示することはとても重要だということがわかった。」

「授業を受ける前は、誰にでも関係する話とは思っていなかった。授業を受けてから、死について、脳の構造、臓器の役割をよく考えるようになって、新聞やニュースで臓器移植について取り上げられていると、自然と目が向くようになった。」

当時、看護大学を目指していた私にとって、特に関心を持って佐藤先生の授業を受けていた。その時の授業で、将来、ドナーになろうと思うかどうかを考え、また、自分ではなく家族が脳死になったら提供をするかしないかについて深く考えた。いつ自分や家族がそのような状況になってもいいように家族と話し合うことができ、もしもの時にどのように決断をしたらいいかを把握することができた。そして進学先でも臓器移植の講義があり、高校時代にすでに臓器移植についての基本的な法律、知識についても学んでいたため、ほかの学生より講義を理解することができた。今振り返ると、高校2年生の時は死生観についてあまりはっきりとした考えが持っていなかったが、しかしそれがきっかけとなり、今では随分と見え始めてきた。もし高校生時のきっかけがなければ今でも漠然としていただろう。

「佐藤先生の保健の授業を受けるまで、臓器移植について深く考えたことはありませんでした。私自身、知っていたのは「臓器移植」という言葉だけでした。実際に授業を受けて、日本は死生観の違いからか、欧米と比べ臓器移植の普及が遅れていることを知りました。佐藤先生の授業の中で印象的であったのは、「死」を題材とした授業であることから、一方的、そして無理やり聞くことを強要しなかったことです。それは、臓器移植というものが、人の「生」と「死」の両方に深く関わっていることで、授業の一環といえども、一人ひとりの捉え方や受け止め方が異なることを配慮されたのだと思います。私は、授業の中で臓器移植は誰かから強要されることではないと学びました。そして、臓器移植について「こわい」という感情を打ち消すことが出来ました。また、以前、同窓会などで同級生にあった際、『佐藤先生の保健の授業のノートだけは捨てられない。』と話題にあがりました。それは、この授業なしでは知りえなかった臓器移植のことが詰まっているからだだと思います。そして、多くの生徒が初めて自分の「生」と「死」に向き合うきっかけとなったからであると思います。」

「授業を受けた後、娘が意思表示カードに勝手に署名し、携帯するのではなく、家族で話し合ってから意思を記したいと希望してきたとき、授業内容が深く伝わっているのだと確信し安堵しました。」

「娘と話し合い、「提供したい」という娘の意思に賛成した。しっかり考えられていたし、立派だと思った。ただ、親としても複雑な気持ちだった。だからこそ、十分に話し合わなければいけないことだと思った。次の時代に命を産み育てる娘だからこそ、母親としても、命の勉強をこれからも、もっともって、お互いに考えていきたい。」

今まで家族や多くの人に支えられてきた。これからは社会貢献できたらいいと思う。

臓器移植について少しは知っていた。しかし今回、詳しく知ることができたのでたくさんの発見がありました。私はもともと、人の命はその人のものという考えでした。移植をすることで、自分の一部が他の人のものになることに少し抵抗がありましたが、自分の命が新しい人生を歩むということもいいのかもしれないと思えるようになりました。

臓器移植について知らないことが問題だと思う。もっと世の中の理解を深めるべきだ。

授業を受ける前は提供したいとは思っていませんでした。しかし、話を聞き、社会の役に自分も立ちたいと思えるようになってきました。

死んでからは考えられません。社会全体がもっと臓器移植について知ったり、理解したりしておくべきだと思います。ちなみに私は家族と話し合い、提供したいと思っています。